

マダム・ジレンスキーと フィンランドの王様

*Madame Zilensky and
the King of Finland*

カーソン・マッカラズ
訳：大串尚代

HOTEL
Les Trois
Moulinets

Mena

マダム・ジレンスキーとフィンランドの王様

カーソン・マッカラズ

『ニューヨーカー』1941年12月20日号 pp. 15-18

訳：大串尚代

ライダー大学音楽科のファカルティとしてジレンスキー夫人を迎え入れることになったのは、ひとえに主任であるブルック氏の尽力によるものだった。大学側はこの人事を有り難いことと考えていた。ジレンスキー夫人の評価は、作曲家としても教師としても見事なものだったからだ。ブルック氏は責任をもって彼女のために家を見つけた。庭付きの居心地のよさそうな家で、大学に通うにも便利だったし、ブルック氏が住んでいる共同住宅の隣だった。

ジレンスキー夫人がやって来るまで、ウエストブリッジの街で彼女を知る人は誰もいなかった。ブルック氏は音楽雑誌で彼女の写真を見たことがあったし、ブクスフーデのとある自筆譜の信憑性について手紙を出したこともあった。それに、彼女に音楽科の教員に加わってもらうよう手続きをしている間、事務的なやりとりのために電信や手紙を何度か交わしてした。はっきりとした生真面目な筆跡の人だった。こうした手紙の中で唯一首を傾げるようなことがあったとしたら、それはブルック氏にはまったくあずかり知らぬ物や人物についての言及が時おりなされることだった。たとえば「リスボンの黄色い猫」だとか「可哀想なハインリッヒ」といった具合だ。ブルック氏はこうした脱線は、ヨーロッパから家族を連れて出てくるために混乱があるからだろうと思っていた。

ブルック氏はどこかパステル画を思わせる人物だった。長年モーツァルトのメヌエットを教え、減七和音と短和音を説明してきた彼は、職業柄注意深い忍耐力を備えていた。多くの場合、気づいたことは自分だけに留めていた。彼は大学の中のあれこれや、委員会などといったものを毛嫌いしていた。何年も前、音楽科のみなで集まって、ザルツブルグで夏を過ごすことになったとき、ブルック氏はぎりぎりのところでこっそり抜けだし、ひとりでペルーへと行ってしまった。ブルック氏には多少変わったところがあったが、他の人にそうした傾向があっても寛大だった。実際のところ、ブルック氏は馬鹿げたことを結構楽しむ方ではあったのだ。なにかゆゆしきつじつまの合わない事態に直面すると、ブルック氏は心の内が少しばかりむずかゆくなり、面長の穏やかな顔を引き締め、灰色の瞳を鋭く光らせるのだった。

秋学期が始まる一週間前に、ブルック氏はウエストブリッジ駅でジレンスキー夫人を迎えた。彼女のことはすぐにわかった。ジレンスキー夫人は背が高くすらりとしており、顔は青白くやせかけていた。彼女の瞳には深い影が落ちており、黒いぼさぼさの髪は額から後ろに押し上げてあった。ほっそりとした大きな手をしていて、かなり汚れていた。会ってみると、全体として彼女には品格と同時にとらえどころのなさがあった。そこでつかの間、ブルック氏は後ずさると、カフスボタンを落ち着かない様子でいじりながら立っていた。ジレンスキー夫人の服装は黒いロングスカート、型くずれした古びた革のジャケットというものだったが、にもかかわらずおぼろげなエレガントさがあった。ジレンスキー夫人は三人の子どもを連れていた。上は一〇歳、下は六歳で、三人ともブロンドの髪をしており、ぼんやりとした目つきをしていたが、可愛らしかった。さらにもうひとり、年配の女性と一緒にいたが、後でこの人はフィンランド人のお手伝いであることがわかった。

ブルック氏が駅で見つけたのはこの一団であった。彼らが一緒に持って来たのは楽譜の入った巨大な箱が二つだけだった。この

ほかの身の回りのものは、スプリングフィールドの駅で乗換をするときに置き忘れてきてしまったという。そんなことは誰にでも起こりうることだ。ブルック氏は全員をタクシーに乗り込ませると、これで一番やっかいなところは終わったと思った。ところがジレンスキー夫人は突然ブルック氏の膝の上をまたいで車外に出ようとしたのである。

「大変！」と彼女は言った。「置いてきてしまいましたわ——なんて言うのですっけ？——わたくしのカチ、カチ、カチ——」

「時計ですか？」とブルック氏がたずねた。

「違いますわ！」ジレンスキー夫人はぴしゃりと言った。「あれですわ、カチ、カチ、カチ」彼女は人差し指を振り子ののように左右に振った。

「カチカチ、ですか」とブルック氏は額に手をあてると目を閉じた。「もしやメトロノームのことをおっしゃっているのでしょうか？」

「それです！ それですわ！ わたくし列車を乗り換えたところでどうやらなくしてしまいました」

ブルック氏はジレンスキー夫人をなだめようとした。呆然としつつも礼儀正しく、明日別のメトロノームを手に入れましょうとまで提案した。しかしこの時、他にも気にかけるべきあらゆる荷物がある中で、一台のメトロノームのことをこれだけ騒ぎ立てることに、いささかの好奇心を駆り立てられたことをブルック氏は認めなければならなかった。

ジレンスキー一行は隣の家に入居し、はためには万事うまくいっていた。子供たちは物静かだった。名前はシグモンド、ボリス、そしてサミーといた。三人はいつも一緒におり、一列縦隊になってお互いの後をついて回っていた——たいてはシグモンドが先頭だったが。子どもたちの間では、ロシア語、フランス語、フィンランド語、ドイツ語、英語が入り混じった、やぶれかぶれと

いった発音の、一家特製の 에스ペラント 語が話されていた。他人がそばにいるときには、子供たちはぷつぷつと口を閉ざしていた。ジレンスキー一家は、ブルック氏を不安にさせるようなことは何も言ったりはしなかったが、ほんのちょっとした出来事はいくつかあった。たとえば、ジレンスキー家の子供たちが家にいるときに、はつきりと意識はできないものの、何かブルック氏の心にひっかかるものがあった。ようやく彼はその理由がわかった――それはジレンスキーの子どもたちが決して絨毯の上を歩かない、ということだった。子供たちは一列に並んで絨毯が敷かれていない床を歩いていた。部屋に絨毯が敷き詰められている場合には、子どもたちはその部屋のドアの前に立ったまま、中には入らないのだ。それからこういうこともあった。数週間たっても、ジレンスキー夫人は家に落ちつこうという様子を見せず、テーブルとベッド以外のものを家に揃えることはなかった。玄関の扉は昼でも夜でも開け放され、まもなく家は何年もうち捨てられた場所のような、奇妙にもすさんだ様子を帯び始めた。

一方で大学はジレンスキー夫人に満足すべき理由はおおいにあった。彼女の教え方は情熱的で断固としていた。どこぞのメアリ・オーウェンだとかバーナディン・スミスだとかが、スカルラッティ風のトリルを正確に弾けなければ猛烈に憤慨した。大学のスタジオのために四台のピアノを手に入れた彼女は、びっくりしている四人の生徒を座らせ、バッハのフーガを演奏させたりした。学科内で彼女がいる方から聞こえてくる騒音はただごとではなかったが、ジレンスキー夫人は気にする風でもなかったし、もし純粋な意志と努力によって音楽的な理想を理解しようとするのであれば、ライダー大学は最善を尽くしていた。夜にはジレンスキー夫人は、十二番目の交響曲に取り組んでいた。彼女はまったく睡眠をとっていないようだった。ブルック氏が居間の窓から外を見るとき、それが夜の何時であれ、ジレンスキー夫人のスタジオに明かりがついていないことはなかった。ブルック氏が彼女を

不審に思うようになったのは、仕事上の配慮のせいではなかった。

絶対に何かおかしいところがある、とブルック氏が最初に感じたのは、一〇月も終わりに近づいた頃だった。彼はジレンスキー夫人と昼食を一緒にともし、楽しいひと時をすごした。というのも、彼女は一九二八年に行ったアフリカのサファリの様子を事細かに話してくれたからだった。その日の午後遅く、彼女はブルック氏のオフィスにやってきて、入口で何か理由があるといったふうでもなく佇んでいた。

ブルック氏が机から顔を上げてたずねた。「なにかご用事でも？」

「いえ、大丈夫なんです」とジレンスキー夫人は言った。彼女の声は、落ちついており、よく澄んでいて厳かだった。「ちょっと考えていたのですけれど——メトロノームを覚えていらっしやるでしょう。ひよっとしたらわたくし、あのフランス人のところに忘れてきてしまったのかしら」

「どなたですって？」とブルック氏が言った。

「ほら、わたくしが結婚していたフランス人のことですわ」と彼女はこたえた。

「フランスの方ですか」とブルック氏は穏やかに言った。彼はジレンスキー夫人の夫を頭に思い浮かべようとしたが、そうすることを彼の頭が拒否した。そして半ば自分に言うように呟いた。

「お子さんたちのお父上ですね」

「あら、違いますわ」とジレンスキー夫人ははっきりと言った。

「サミーの父親ですけれど」

ブルック氏は素早く何かを察知した。自分の奥深くにある勘が、これ以上何も言ってはならぬと警告した。それでも、秩序への敬意と良心を持つ彼は、こうたずねる気持ちを抑えられなかった。「では、他のふたりのお父上は？」

ジレンスキー夫人は頭の後ろに手をやると、短く刈り込まれた髪をぐしゃぐしゃとかきまわした。ぼんやりとした顔つきになり、しばらくの間こたえなかった。やがて静かに口を開いた。「ボリスの父親はピッコロ奏者でした」

「シグモンドは？」とブルック氏がたずねた。彼は整頓された自分の机を見渡した。採点が終わった書類は積み重ねられ、三本の鉛筆はきちんと削られており、象牙のペーパーウェイトが置かれている。顔を上げてジレンスキー夫人を見ると、彼女は見るからに懸命に考えているようだった。彼女は部屋の隅を見つめていた。眉はさがり、顎が左右に揺れていた。ついに彼女はこう言った。「わたくしたち、シグモンドの父親のことを話していたのでしたっけ？」

「あ、いえ」とブルック氏は言った。「そういうわけではなく」

ジレンスキー夫人は、これで最後と言わんばかりに凜とした声で言った。「わたくしと同国の男性でしたわ」

ブルック氏にとっては、誰がどうということはなかった。偏見など持っていなかった。彼が思うに、人は十七回でも結婚すればいいし、中国人の子どもを持ったっていい。しかしこのジレンスキー夫人との会話の何か、彼の心にひっかかっていた。突然、ブルック氏は気がついた。それは子供たちが、ジレンスキー夫人にまったく似ていなということ、にもかかわらず、三人はお互いにそっくりの顔立ちをしている、ということだった。父親が全員違うということだから、子供たちがよく似ているというのは驚きだ、と彼は思った。

ジレンスキー夫人はこの話題を終えたようだった。革の上着のジッパーをしめると、背を向けた。

「やはりあそこに置いてきたのね」と彼女はすばやくうなずきながら言った。「あのフランス人の家に」

音楽科ではものごとは平穩に過ぎていった。ブルック氏には対応しなくてはいけない重大なもめごとはなかった——たとえば去年自動車修理工と駆け落ちしてしまったハーブの教師のようなことは。あるのは、ジレンスキー夫人がどうにも気にかかってしまう、ということだけだった。彼女との関係のどこがおかしいのか、あるいはなぜ自分の感情がこれほどかき乱されるのか、ブルック氏にもわけがわからなかった。そもそも、彼女は世界中を飛び回っていた人で、遠く離れた場所のことをちぐはぐに話す人だ。かと思うと何日も口を開かず、上着のポケットに手をつっこみ、物思いに耽っているという顔つきで廊下を行ったり来たりする。そして突然ブルック氏を引きとめて、話しがあちこちに飛ぶ一人語りを長々とぶちまけるのだった。そのとき彼女の目は何をも気にすることなくキラキラと輝き、声には熱っぽさがこめられていた。彼女はあらゆることを話すか、何も話さないかのどちらかだった。とはいえ、彼女が話すことはどんなことでも、例外なく、どこか滑り落ちていくように奇妙なところがあるのだった。ジレンスキー夫人がサミーを床屋に連れて行くと話したとしたら、まるでバグダッドでの午後について話しているかのような、耳慣れない印象をもたらすのだった。ブルック氏は、それがわからなかった。

思いもかけず、真実がやってきた。そしてあらゆることが完全にはっきりとした——すくなくとも状況がよくわかるようになった。ブルック氏は早めに帰宅し、居間の小さな暖炉に火をつけた。その夜彼は心安らかにくつろいでいた。靴下をはいて暖炉の前に座り、横のテーブルにはウィリアム・ブレイクの本を置き、アプリコット・ブランデーをグラスに半分注いだ。一〇時になり、暖炉の前で気持ちよくまどろんでいると、頭の中はぼんやりとしたマーラーの曲と、漂う思考ともいえない何かでいっぱいになっ

ていた。すると急に、このえもいわれぬまどろみの中から、四つの単語が頭に浮かんできたのである——「フィンランドの王(ザ・キング・オブ・フィンランド)」と。この言葉には馴染みがあるように思われたが、それをどこで聞いたのか、最初のうちはわからなかった。やがてブルック氏は唐突にその言葉の出所がわかった。その日の午後、彼がキャンパスを横切って歩いていると、ジレンスキー夫人が声を掛けてきて、途方もない長話を始めたのである。ブルック氏は話の半分しか聞いておらず、対位法のクラスで提出されたカノンの楽譜の山のことを考えていた。いまその言葉が、彼女の声の抑揚とともに、陰湿なほど正確に思い出されたのである。ジレンスキー夫人はこう話し始めた——「ある日わたしが焼菓子のお店の前で立っていましたら、櫓に乗ったフィンランドの王様が通り過ぎていられましたの」

ブルック氏は座りながら背筋をさっと伸ばすと、ブランデーのグラスを置いた。あの女は病的な嘘つきなんだ。教室の外で口にするほぼすべてが、本当のことではないんだ。一晩中仕事をしたとしても、自分は夜に映画を見て過ごしたとわざわざ言うだろう。オールド・タバーンで昼食を取ったとしたら、子供達と一緒に家で昼ご飯を食べたと言うに違いない。あの女はひたすら病的に嘘をつくんだ。それですべての説明がつく。

ブルック氏は指の関節を鳴らすと、椅子から立ち上がった。最初のうちは、彼は激しい憤りを感じていた。来る日も来る日もジレンスキー夫人は、厚かましくもわたしのオフィスに座り、とんでもない嘘の洪水をわたしに浴びせていたんだ。ブルック氏は猛烈に腹が立った。部屋の中を行ったり来たりしていたあと、キッチンに行き、鯛のサンドイッチを作った。

一時間ほどして、暖炉の前で座っていると、それまでの苛立ちは、謎を解明しようとする学者らしい思考へと変化していった。わたしがしなければならないのは——と彼は考えた——全体の状

況を個人のことからとは切り離して見渡し、ジレンスキー夫人のことを、医者が病人を診察するように見てみる、ということだ。彼女の嘘は、悪意がある類のものではない。彼女は騙そうという意図があつて嘘をついたのではないし、彼女の嘘は、なにか有利になりえることのために使われたわけではまったくない。そこがまた気に入らない。背景の動機がまったくないのだから。

ブルック氏はブランデーの残りを飲み干した。このときはもう真夜中に近かつたが、そのとき次第に彼はさらなる理解に達したのである。ジレンスキー夫人が嘘をつく理由は痛ましくはあるが、単純なものなのだ。彼女はこれまでの人生の間ずっと働いてきた——ピアノを弾き、教え、あの美しく壮大な十二の交響曲を作曲してきた。昼も夜も彼女はこつこつと働き、悩み、作品に魂を込めてきた。そしてその他のことは彼女にはほとんど残されていなかったのだ。人間として、彼女はこの欠落に苦しみ、それを埋め合わせるためのことをしたのだ。彼女が図書館の机に身をかがめて夜を過ごしていたのに、自分はトランプをしていたのだと後に語ったのだとしたら、それこそ彼女はどちらもやりおおせたということなのだ。嘘には違いないが、彼女はそれを自分でしたものとして生きたのだ。嘘をつくことで、彼女は仕事以外に残されたほんの少しの自分の存在を二倍にし、自分の人生のぼろぼろになった切れ端を広げていったのだらう。

ブルック氏は暖炉の火を見つめ、ジレンスキー夫人の顔を思い浮かべた——疲れた黒い瞳、あれこれと羨をうけたとおぼしき口元をした、厳しい顔。彼は胸元にあたたかさを感じた。そして憐憫の情、守ってあげなくてはという感情、そして息詰まるような理解を。

やがてブルック氏は歯を磨いてパジャマに着替えた。自分は現実的であらねばならない。このことでなにがはっきりしたのだらう？ フランス人、ピッコロ吹きのパーランド人、そしてバグ

ダッド？ それから子供たち、シグモンド、ボリス、サミー——彼らは何者だ？ 結局三人とも本当に彼女の子どもなのか、あるいはどこかからかき集めてきたのだろうか。ブルック氏はメガネを拭くとベッドの横のテーブルに置いた。彼はジレンスキー夫人についてただちに理解にいたらねばならない。そうしなければ、学科内でこれまでにない問題が起こる状況が出てくるだろう。二時だ。彼は窓の外に目をやり、ジレンスキー夫人の仕事部屋の明かりがまだついているのを見た。ブルック氏はベッドに入り、暗闇に向かってひどいしかめ面をすると、翌日何を言うかを考えようとした。

ブルック氏は朝八時にオフィスにいた。彼は机の向こうで背中を丸めて座り、ジレンスキー夫人が廊下を通りかかったら声を掛けようと待ち構えていた。それほど待たないうちに、彼女の足音がきこえるやいなや、ブルック氏は夫人を呼んだ。ジレンスキー夫人が戸口に立った。彼女はぼんやりとして疲れているようだった。「ごきげんよう。昨晚はよく休めましたわ」と彼女は言った。「よろしければどうぞおかけ下さい」とブルック氏は言った。「お話ししたいことがあるのです」。ジレンスキー夫人は書類を入れた紙挟みを横に置くと、ブルック氏に向き合う位置にあった肘掛け椅子にだるそうにもたれかかった。「なんででしょう？」

「昨日、わたしがキャンパスを歩いているとき、話しかけて下さいましたね」と彼はゆっくりと切り出した。「それで、もしわたしが思い違いをしていなければ、ケーキ屋さんとフィンランドの王様のことを何か話されたと思うのですが。違いますか？」

ジレンスキー夫人は頭を片方に傾け、思い出すように窓敷居を見つめていた。

「何かケーキ屋さんのことで」と、彼は繰り返した。

彼女のくたびれた顔がぱつと明るくなった。「ええ、もちろん」と彼女は勢い込んで言った。「わたくしがお話ししたのは、その店の前で立っていたときにフィンランドの王様が――」

「ジレンスキー夫人！」とブルック氏は声をあげた。「フィンランドに王様はおりません」

ジレンスキー夫人はまったく意味がわからない、という顔をした。そしてすぐにふたたび話し始めた。「わたくしはビャーネの焼菓子店の前で立っていたのですわ。ケーキを見ていて振り向いたときに、突然フィンランドの王様が目に入ってきて――」

「ジレンスキー夫人、いま申し上げた通り、フィンランドに王様はいないのです」

「ヘルシンキでは」と必死になってふたたびジレンスキー夫人が話し始めた。そしてこのときも、ブルック氏は彼女が王様のくだりまで話したところで、口を挟んだ。

「フィンランドは民主制です」と彼は言った。「フィンランドの王様を見たということはありえないのです。ですから、あなたがいまおっしゃったことは真実ではないのです。まったくもって、真実ではないのです」

この時のジレンスキー夫人の顔を、ブルック氏はこの後も決して忘れることは出来なかった。彼女の目には驚きと、落胆と、そして隅に追いやられた恐怖のようなものが宿っていた。彼女は自分自身の内側にある世界がすべてはじけ散り、バラバラになっていく姿を見ている人のような表情をしていた。

「哀しいことですが」とブルック氏は心からの同情を込めて言った。

しかしジレンスキー夫人はなんとか落ち着きを取り戻した。彼女は顎をきつと上げると冷然と言い放った。「わたくしはフィンランド人ですわ」

「そのことはおたずねしてはおりません」とブルック氏はこたえた。しかしちょっと考えてみれば、彼はある意味でそれをたずねていたとも思った。

「わたくしはフィンランドに生まれた、フィンランド市民です」

「それは結構なことです」とブルック氏の声が大きくなった。

「戦争中は」とジレンスキー夫人は熱心に続けた。「バイクに乗って伝令使として働きました」

「あなたの愛国心は、ここでは問題ではないのです」

「わたくしが帰化申請をして出国できたからといって――」

「ジレンスキー夫人、わたしは――」とブルック氏は言いよどんだ。彼の両手は机の端を掴んでいた。「それは関係ありません。問題は、あなたが主張し続けていることなんです、あなたをご覧になったと――見たとおっしゃる――」しかし彼は言い終えることができなかった。彼女の顔つきを見て、ブルック氏は言葉を止めた。ジレンスキー夫人は死んだように青ざめ、口の周りには影ができていた。彼女の瞳は大きく見開き、運命が尽きたかに見えたが、しかし誇りを失ってはいなかった。突如、ブルック氏は自分が殺人者であるかのように感じた。ブルック氏は激しく心が――同情、良心の呵責、そして理屈にあわない愛情が――揺さぶられ、両手で顔をおおった。彼は心の中の湧き起こる感情が静まるまで、口を開くことができなかった。それから彼は、とてもかすかな声でこう言った。「もちろんですとも。フィンランドの王様ですよ。素敵な方でしたか？」

一時間後、ブルック氏はオフィスの窓から外を眺めていた。閑散としたウエストブリッジ通りに沿って飢えられた木々は葉が落ち、大学の灰色の建物は落ちついて寂しげな様子だった。ぼんやりと見慣れた光景を見ていると、ドレイク家の年老いたエアデール犬がよたよたと通りを歩いているのに気づいた。それはこれまでも百回は見ている光景だった。では、彼は何かおかしいと思っってはっとしたのだろうか？　そこで彼は背筋がひやりとする

ような驚きとともに理解した。老犬は後ろ向きで進んでいたのだった。ブルック氏はエアデール犬が視界から外れるまで見続けた。そして対位法の授業で提出されたカノンの採点に取りかかったのだった。

